



アジア民族舞踊交流会終演後 舞台上にて

ごあいさつ

財団法人 黛民族舞踊文化財団

理事長 犬丸 直

今年中国でははじめてのオリンピック大会が催されます。世界中から大勢の人々が集りますので、諸々の準備に各方面の方々にはさぞかしお忙しいことと存じます。にもかかわらず民族舞踊団の方々は、故黛節子先生の敷かれたレールにしたがって、来日され、私共に中国の伝統的民族舞踊を、また味わい楽しむ機会を与えて下さいました。また韓国からも民族舞踊の専門家が同時に訪日され、民族舞踊の三国交流が実現したことは、実に結構なことで、日中韓三国の文化の相互理解を高めるうえで誠に有益であると存じます。

私自身が御地にうかがって、それぞれの風土に接し、その中でそれぞれの民族のこころを肌身に感じとることが、年をとってできないのがまことに残念ですが、毎回舞踊家の方々の若く活発な活動振りに接し、その芸術のみごとさと、ほとぼしる民族精神を感じ、心に銘じております。来年はどのような芸術を見せて下さるか、楽しみにして来日を御待ちしております。

毎度のことですが、皆様方の来日が皆様方ひとりひとりにとって、有意義であるとともに、生涯にわたり、楽しい思い出となることを、心よりの念願とします。

アジア民族舞踊交流会

2007年7月5日～7月16日



青木文化庁長官表敬訪問

左より大野常務理事、尹徳卿舞踊団団長、青木文化庁長官、王仕宗中国舞踊団団長
段斌氏、和玉花氏、密秀珍氏、普利顔氏

【中国雲南省怒江傈僳（リス）族自治州民族文化代表团メンバー】

団 員	王 仕 宗	雲南省怒江傈僳（リス）族自治州州委副書記		
	段 斌	中共雲南省党校規委書記、文芸評論家		
	和 玉 花	怒江州委宣伝部長		
	普 利 顔	怒江州文化局局長		
	密 秀 珍	瀘水県宣伝部長		
	潘 文 海	怒江州委宣伝部宣伝課長		
	和 英 賢	怒江州民族歌舞団団長、怒江州音楽家協会副首席		
	李 麗 娜	車 四 恒	玉 花	
	孔 軍	杜 雪 慧	鄧 前 普	
余 福 娜	和 黎 春	曾 永 福	漢 玉 花	

【大韓民国尹徳卿舞踊団訪日代表团メンバー】

団 長	尹 徳 卿	ソウオン大学舞踊学科	教授						
団 員	李 愛 賢	朴 徳 相	朴 柱 英						
	李 知 恩	呉 明 姫	朴 恵 京				姜 隅 美		

【黛民族舞踊団メンバー】

団 長	大野 晃			
団 員	黛 琉美	黛 智英	黛 今日子	黛 莉香
	黛 真也	伊藤 みつ子	五月女 舞穂	
	森田 明美	田母神 裕子	宇野 あかり	花柳 翁麗

2007 年アジア民族舞踊交流会報告書

2007年

7月 5日(木) 成田空港着 舞台打合せ。歓迎レセプション
7月 6日(金) 太田市立綿打小学校にて児童と共にワークショップ
7月 7日(土) 太田市新田文化会館エアリスホールにて日中韓アジア舞踊交流会
7月 8日(日) 藤沢市民会館小ホールにて日中韓アジア舞踊交流会
7月 9日(月) 文化庁長官表敬訪問
中国大使館、韓国大使館表敬訪問
7月10日(火) 赤坂区民センターにて日中韓アジア舞踊交流会
7月11日(水) 日本橋劇場にて日中韓アジア舞踊交流会
7月12日(木) 取材旅行
7月13日(金) 取材旅行、東京ディズニーランド見学
7月14日(土) 学習院創立百周年記念会館にて日中韓アジア舞踊交流会
7月15日(日) さよならパーティー
7月16日(月) 成田空港より帰国

出演 中国雲南省怒江傈僳族自治州民族文化代表团・韓国尹徳卿舞踊団・黛民族舞踊団

主催 財団法人 黛民族舞踊文化財団

共催 財団法人 太田市新田文化スポーツ振興事業団
財団法人 港区スポーツふれあい文化健康事業団
学習院大学生涯学習センター
湘南日韓親善協会
湘南日中友好協会

後援 文 化 庁
中 華 人 民 共 和 国 駐 日 本 国 大 使 館
駐 日 本 大 韓 民 国 大 使 館
日 本 中 国 文 化 交 流 協 会

2007 年度は 7 月に訪日団を迎えることになりビザの問題などが生じないよう早めに中国と頻繁に連絡をとる。

3 月頃交渉初期には 8 人の予定だった中国雲南省の訪日団員の数がその後変更になり、最後は 17 人になる。しかし訪日間際の 7 月 1 日に幹部 3 人のビザが発行されないため、日本から重慶総領事館に電話で連絡をとって来日できるように至急手配してほしいとの緊急連絡が入る。重慶総領事館に電話を入れ事情を説明、領事館側から必要文書をその夜中に送るように言われたので至急 30 枚以上に及ぶ文書を作成し、重慶総領事館に FAX 送信する。翌朝電話を入れ、ビザが発行されたという確認がとれ、ようやく日本側も安堵し訪日団の来日を待つこととなった。



チェンオー（中国）

7月5日（木）

張先生及び重慶総領事館とのやり取りが終わり中国怒江州の舞踊団が無事来日することが決まったが、予定していた昼の飛行機がとれず、夕方5時成田到着の便で来日することが判明。韓国の尹徳卿舞踊団はひと足先にリムジンで都市センターホテルに到着。遅れて到着した中国の舞踊団と尹徳卿先生一行と日本側スタッフを交え歓迎会を開く。続いて舞台監督、照明、音響のスタッフを交え打ち合わせを行う。翌日からの舞踊団の荷物の取り分けなどを終了して各自ホテルの自室に戻る。

7月6日（金）

全員9時40分浅草発の東武伊勢崎線の特急で群馬県太田市へ向かう。エアリスホール差し回しのバスでホールに着く。

この日のワークショップ（アウトリーチ）は中韓訪日団員と太田市新田上田中町綿打小学校の3年生全員参加。韓国は小太鼓を打ちながらの踊り、中国は中国雲南省の少数民族リス族の民族舞踊を小学生に教える。先生も生徒たちも皆がんばってよく踊れるようになった。（生徒たちはこの日の体験をもとに、9月22日の綿打小学校の運動会で保護者の作った衣裳をつけて難しいリス族の踊りを発表した。こうした活動は文化庁が推進する子供達に対する民族舞踊普及事業の一環としても考えられる）

その後、新田義貞に纏わる東毛歴史資料館を訪問。館長の案内で原始・古代・中世・近世・現代と移り行く日本歴史の一端の説明を受ける。18時より日・中・韓の舞踊団員はエアリスホール滝沢館長主催の歓迎夕食会に臨む。

7月7日（土）

朝10時から太田市新田のエアリスホールでリハーサルを行う。

14時開演、客席がほぼ満席になる程の入り、一同感激のエールを交わす。18時23分太田発19時53分浅草着の東武特急電車で帰京。

浅草で全員焼肉料理の夕食をすませ、メトロで赤坂見附に戻る。

7月8日（日）

朝7時にホテルを出発。全員バスに乗り、藤沢市民会館へ。東海道、途中、道路がすいていたので予定より早く現地に到着。とりあえず劇場でリハーサル。中国の団長他幹部6名は聶兎記念碑、藤沢の海、江ノ島等をタクシーに乗って見学。14時開演。この公演も満席となる。

17時終演後市民会館5階で日中韓の歓迎パーティー。藤沢市収入役、湘南日中友好協会の会長、湘南日韓親善協会の会長より暖かい歓迎の挨拶。盛大な交流の実績を残し全員バスで東京へ。



太田市立綿打小学校にて中国舞踊指導



太田市立綿打小学校にて韓国舞踊指導



アジア民族舞踊交流会 舞台にて
右より大野常務理事、王仕宗中国舞踊団団長、
尹徳卿舞踊団団長

7月9日（月）

8時にホテルを出発。メトロで移動。10時文化庁長官への表敬訪問。中国、韓国のそれぞれの団長があいさつし、長官におみやげを差し上げた。長官より中国、韓国へ質問があったので、各団長がお答えした。お忙しい長官のため短時間で退出する。昼食は黛ビル隣の木曽路ですきやき（日本食）。

午後は韓国大使館、中国大使館にそれぞれわかれて表敬訪問し、おみやげを差し上げた後、全員でお台場へと出かけ、ショッピングや海岸の散策を楽しんだ。

7月10日（火）

午前中、皇居・国会議事堂等の見学。

14時から赤坂区民センターにてリハーサル。18時開演。東京では、ウィークデーに観客を集めるのは難しい事を痛感する。

7月11日（水）

一行は午前中、それぞれ通訳をつけて自由見学会。14時から日本橋劇場でリハーサルの後 18 時本番。夕食は黛ビル3階の「わたみんな家」でにぎやかにとる。

7月12日（木）

この日は踊りを離れて、取材旅行の日。海を見たいという中国の団員のためにもと、東京発9時の踊り子 105号に乗って伊豆下田へと旅立った。途中、伊東を過ぎると太平洋の一部が姿を現す。楽しみにしていた富士山は曇り空のためにはっきり見えず残念だったが、海を見ながら下田到着。13時に下田からロープウェイに乗り、寝姿山を散策。眼下に広がる大島を始めとする伊豆七島、爪木崎、下田港、また遥かに天城連山等の雄大な景勝を満喫した。次は14時発の黒船に乗って伊豆の海を回遊。カモメがたくさん飛んで来て中国の人も韓国の人もエサをやりながら、大喜びで写真をとるなど楽しい船旅を終えた。その後、唐人お吉で有名な玉泉寺、了仙寺、宝福寺をまわって下田駅に戻り、下田 16 時 33 分発の列車に



稲取海岸を散歩する中国の舞踊団員



中国大使館にて張愛平参事官と



さよならパーティー〈赤坂飯店〉 中央は犬丸理事長

乗り、稲取駅に向かう。稲取温泉の支配人が駅まで出迎えてくれる。

17時には大野常務理事も合流、18時より宴会に入った。大野常務理事のあいさつで始まり、海の幸の船盛りなど豪華な食事と日本酒ですっかり興が出て皆で唄ったり踊ったりの楽しい3時間を過ごした。閉会の後は温泉に入ったり、夜の海を眺めたりしてから深い眠りについた。

7月13日（金）

中国の王団長などは早朝からホテル前の水際まで行き、波しぶきに体をぬらしたりしていた。

8時に朝食をすませ、踊り子 102 号で稲取から東京へ戻る。

12時に東京到着。午後はディズニーランド見学。若人組とシニア組にわかれてそれぞれの好みに応じてアトラクションを楽しんだ。人出の多さに一同がびっくりする場面もあった。

7月14日(土)

10時、学習院創立百周年記念会館に到着。12時30分から13時10分までアジア民族舞踊交流会研究会のシンポジウムを開催。諏訪春雄学習院大学名誉教授の司会で、日本・中国・韓国の舞踊団の団長がパネラーとして参加し、

- 1 自己紹介と日本舞踊団の歴史を紹介
- 2 自己紹介と中国代表団の歴史を紹介
- 3 自己紹介と韓国代表団の歴史を紹介
- 4 基礎訓練について 日中韓の団員による実技
- 5 伝統の保存と現代化について

短時間のシンポジウムだった今回は中国側の人数が多かったけれども全員舞台上に上った。その後13時30分より舞踊交流が始まり、公演終了後一行は新宿に出てショッピング。

夕食は「木曽路」で牛肉料理。一行は日本の牛肉がおいしいと満足。

7月15日(日)

浅草名所金龍山浅草寺へ。雷門から入り、本堂でお参りして宝蔵門の大わらじ、大提灯、吊灯籠にびっくりし、伝法院、影向堂と薬師堂、弁天堂、五重塔院等を見学、有名な仲見世通りで買物。はんでん又はゾウリ、子供の着物等おみやげを買物中、たまたま選挙の遊説中の参議院議員候補で当財団の前評議員中山恭子先生にばったり出会った。「今日はアジア民族舞踊交流会ですね。がんばってね」と励まされ、こちらも中山先生の必勝を祈って、お別れした。

昼食を上野の山の精養軒で済ませ、美術館とビックカメラにわかれて自由時間とする。

犬丸理事長、大野常務理事が一行を出迎え 18時から赤坂飯店でさよならパーティーを開催。老酒などを酌み交わし、おみやげ交換を行う。先ず日本から中国、韓国の皆さんへ、次は中国から日本、韓国への交換、更に韓国から日本、中国への交換が続いた。皆大喜びで日本の最後の夜を満喫した。

7月16日(月)

ホテルで朝食をすませ、中国怒江州訪日団と成田へ。成田で怒江州訪日団を送り、続いて韓国尹徳卿舞踊団を送る。

こうして第12次日中韓のアジア民族舞踊交流会を無事に終える。



学習院創立百周年記念会館での公演後
諏訪学習院大学名誉教授(前列左)と共に



アジア民族舞踊交流会研究会のシンポジウム
左より中国怒江州歌舞団、韓国尹徳卿舞踊団、日本舞踊民族舞踊団

—交流会の舞台より—



龍の舞 (中国)



珍島鼓舞 (韓国)



会津磐梯山 (日本)



かつぼれ 黛琉美 (日本)



太平舞 尹徳卿 (韓国)

《交流会プログラム》

第一部

1. 伊予万才 (日本・愛媛県)

四国伊予松山に伝わるもの、南蛮風な大変変わったものです。現代のリズムに合わせて踊る軽妙なモダンなものです。

2. アチムグァ (山羊の舞) (中国・リス族)

“アチムグァ”はヤギの舞という意味で、リス族の古風で純朴な伝統舞踊の一つで、雲南省西北部の福貢や貢山、維西で流行しました。この舞踊は音楽と深く結びつき、変幻自在、野生の美と神秘的な調べを合わせ持っています。



アチムグァ (中国)

3. 湖南剣舞 (韓国)

新羅時代に発祥したと伝えられているこの踊りは剣器舞または黄唱郎舞とも言います。最初は民間の仮面舞として演じられてきました。

高麗を経て李氏朝鮮中期まで民間で伝承されましたが、李朝の第28代純祖の時代によりやうく宮廷で女妓によって演じられ、李朝末期まで伝承されました。宮中に入ってから仮面はなくなり、1900年代からは剣が短く回転するという小道具化され、平和で幽遠な武舞の一種となりました。

4. かつぼれ (日本・東京都)

「かつぼれ、かつぼれ、甘茶でかつぼれ」
かつぼれは江戸前の歯切れのよさをもつ踊りです。

5. ゴウチュン (中国・リス族)

この踊りは二人舞です。リス族の伝統的な民間音楽の“ヨウエー”とリス族舞踊“チェンオー”を踊りの基礎に置き、リス族の青年男女の美しい愛情への憧れを生き生きとあざやかに表現しています。

6. 珍島鼓舞 (韓国)

韓国重要無形文化財第72号。韓国全羅南道珍島地方の鼓舞を、珍島のシッキンクツ(シャーマンの儀式)の保有者であるパク・ピョンチョン先生が再構成した作品で、両手に持ったバチを自由自在にあやつり、リズムカルに舞う味わい深い踊りです。

7. 麦屋節 (日本・富山県)

富山県五箇の庄に伝わるもので、平家の落人によって唄いはじめたといわれ、労作唄の一つでたいへん珍しいものです。笠を手にして重厚に踊ります。

8. 独龍酒歌 (中国・トールン族)

トールン族の人々は伝統的な「カチエワ」祭りで飲酒して誓いを結ぶ習俗を持っています。原始の姿をした踊り手が天の神様の恵みを、村人の平安への祈願を、そしてトールン族の人々の豪放で朴訥な農村的な美しさを表現しています。

9. 太平舞 (韓国)

国の平安と太平聖代を祈願するために踊られた作品で、動きが繊細で優雅で動作一つ一つに節度があります。特にステップが多様で、この踊りだけが持つ味といえるでしょう。韓国重要無形文化財第92号に指定されています。

10. 祝い舞 (日本・宮城県)

〔花田植〕

東北・仙台市の郊外の秋保地区に伝わる民俗芸能で、豊年を願い、一心に祈りを込めて苗を植える乙女達の姿を踊りにしたものです。

〔豊年舞〕

土に生きた私たちの祖先は、豊かな稔りこそこの上ない喜びだったに違いありません。その豊年を祝い祈る踊りこそ、舞踊のエネルギーの原点とも言えます。豊年の喜びを歌い上げた踊りです。

第二部

1. 会津磐梯山 (日本・福島県)

豊年の祝いの時におどられるもの。四つ竹をリズムカルに打ちながら踊る近代感覚溢れる楽しい踊りです。

2. オデデ (中国・ヌー族)

怒江の流域に住むヌー族の伝統的な歌唱の技法です。これは男声と女声で交互に歌うもので、「ダビア」と「口弦」の伴奏と民間舞踊が組み合わされて、ヌー族の男女が楽しく過ごしている生活の情景がイメージ的に表現されています。

3. 扇散調 (韓国)

韓国の南部地方の独特なシャーマンのリズムを参考にして、笛だけで奏でられる独特なシナウィ調のリズムを備えているのが特徴です。月明かりの中、コムゴのしらべにのり、いにしえの女性の繊細で古風な姿を思い、感じさせられる踊りです。

4. 仲里節 (日本・沖縄県)

男女の打ち組み踊りです。
若い男女が前後して、舞台下手から出て お互いに
思いを語り合う様を軽快なリズムにのせて振りで表
現しました。

5. 龍の舞 (中国・プミ族)

この舞踊はプミ族の原生的な舞龍隊形の集団舞を基調として、躍動的な民族音楽を配したもので、強烈なインパクトがあり、見る人の心を揺さぶる力があります。

6. 夜の音 (現代創作舞踊) (韓国)

「私は紙一重だ 一方は明るく 一方は暗い。
夜の微笑は暗く、仮面の階段を降りればそこには
ドアがある。

ドアは開かない。なのにどこからか光がさす 紙
一重の間から…」

台本 Kim Youg Tae
音楽 Hwang Byung Ki
振付・出演 Youn Duck Kyung

7. 生産舞 (中国・リス族)

この舞踊はリズム感にあふれた打楽器の音楽をバックに、タップダンスに似た、韻律に満ちた身体言語を使います。今までに人々が荒野を開拓し、種まきができるという希望を持てるまでの辛苦に満ちた歴史の過程を視覚と聴覚に訴えて表現したものです。

8. 小鼓舞 (韓国)

農楽の形態の民族舞踊。雲の上で遊んでいるような軽快な足さばきと躍動的な動きで、人間の魂をさっとぬかれてしまうような朴徳相の独特な舞は見て
いる私たちの体とこころを神明に導いてくれます。

9. チェンオー (中国・リス族)

この踊りはリス族の伝統的な舞踊の一種で広範囲に伝わっており、リス族の集会などで必ず踊られるもののひとつです。少数民族の「社交ダンス」と見られていて交流の席などでも適宜に踊られます。

10. 黒島口説 (日本・沖縄県)

沖縄県、八重山群島の黒島に伝わる口説歌。島の自然の豊かさ、豊作の有様、島最大の行事である綱引き祭りや、干蛸を盗んだ鼠、それを追いかける猫など、平和な島の年中行事などを振りとともに囃したててコミカルに踊ります。



黒島口説 (日本)

2008年世界舞踊祭に参加

2008年3月1日（土）、2日（日）

茨城大学教授国枝たか子先生主宰の「世界舞踊祭」が、今年も港区赤坂区民センターで開催された。この催しは世界各国の民族舞踊を中心に、出演団体はプロとアマチュアが混じった構成で幅広いジャンルの舞踊グループが出演した。

出演した各団体の演目は次のとおり

3月1日

イサドラ・ダンカンの舞踊

英国スコットランド舞踊

日本の民族舞踊

中国舞踊

スペイン舞踊「アレグリアス」

インド舞踊「バラタナティウム」

地唄舞「雪」

ルーマニア民族舞踊

バレエ「白鳥の湖よりスペインの踊り」

オリガ・サファイアと若いダンサーたち

白拍子の舞「水猿曲」

マレーシア民族舞踊

サモア民族舞踊

オイリュトミー



はねこ踊り（日本）



棒踊り（日本）

3月2日

イサドラ・ダンカンの舞踊

15世紀イタリア宮廷舞踊

スロバキア民族舞踊

琉球舞踊「隼」ヘンサー

インド舞踊（こどもプログラム）

タンダバハダンスカンパニー

モダンダンス

マレーシア民族舞踊

「ムカール・ブダヤ」舞踊団

ギリシャ民族舞踊

「イオニア諸島の踊り」ほか

スペイン舞踊「アレグリアス」

日本民族舞踊（黛民族舞踊団）

地唄舞

韓国舞踊

「ヨーロッパの優雅な様式の舞踊」

オリガ・サファイアと若いダンサーたち

英国スコットランド舞踊

中国舞踊

当舞踊団の演目は次のとおり

はねこ踊り	（日本・福島県）
博多節	（日本・福岡県）
松島音頭	（日本・宮城県）
谷茶前	（日本・沖縄県）
黒島口説	（日本・沖縄県）
棒踊り	（日本・鹿児島県）

スタッフ

総合プロデュース	大野 晃
照明（エクサート松崎）	井上 正美
音響（サウンドクラフト）	小林 史
舞台監督（ニケステージワークス）	八木 清市

製作 世界舞踊祭実行委員会
委員長 国枝 たか子

民族文化の会

学習院大学名誉教授で民族文化の会代表の諏訪春雄先生（当財団評議員）と当財団の大野晃常務理事との共催で毎月開かれている「民族文化の会」も、回を重ねるごとに民族舞踊を含む多方面の先生方のお話が勉強になり、勉強するにあたって知識を得られる貴重な時をすごしている。

今年度は12回（うち11回は当財団4階黛アートサロンで開催）開かれた。日時、内容は次のとおり。

2007年4月8日「インドネシアの文化の多様性—伝統的染色布を通じて」**5月13日**「世界古印刷史と日本」「国文学とは何か、その本質と行方」**6月10日**「漂流民の見た異国」「中国と日本に生きる」「出版から現代日本を見ると」**6月10日**現代の童図像（氣と音楽）**8月5日**「日本の古典芸能—西と東—」「雅楽—実技と理論—」**9月9日**「文明から見るシルクロード」「日本列島と海のシルクロード」「身の回りの数学」**9月9日**「江戸屏風に見る江戸の生活」「江戸しぐさ、江戸がたり」**10月28日**「私の石原莞爾将軍」「古印刷文化史と日本—第2回墨摺りから多色印刷へ—」「北斎の謎」**11月4日**「長崎出島商館長と日本人の交流」「律令体制下の神道と陰陽道」

11月26日特別研究会 於学習院百周年記念会館

中村富十郎、田中伝次郎、中村鷹之資

12月9日「幕末の歌舞伎役者」「歌舞伎と京劇」「小笠原諸島発見の歴史」

2008年1月13日「中国北齊の大沙門僧安法師の器度風流な書」—多造塔堅固思想との関連「日中の星の神話」**2月11日**「多色刷り印刷」「中国の版画」「近代日本版画の潮流と渡辺版画店」**3月16日**「縄文の音」「天皇の後宮」「江戸の大奥」

YOU GO 麻生～ぼくらはみんないきている～

障害者地域作業所映像工房ペリの主催で2007年11月23日に町田市の新百合21多目的ホールで開かれた歌と踊りのイベント「YOU GO 麻生～ぼくらはみんないきている～」に黛民族舞踊団5人がボランティアで出演した。



黛民族舞踊団団員

日枝神社仲秋管弦祭取材日記

2007年9月25日（火）

日枝神社 内庭

仲秋のひとつき、満月の月の光に幽玄な管弦の古式ゆかしい伝統芸術「雅楽」を心ゆくまで堪能したひとつきだった。

山王太鼓 日本人の底をゆり動かすリズムであり、私たちの幼い頃から祭囃子と共にその力強いリズムはおまつりを象徴する響きだった

管 弦	壹越調音取、賀殿急
神楽舞	四方拝、日枝の舞、浦安の舞
舞 楽	振鉾、地久、桃李花

満月の光に幽玄な音色と周りに林立する高層ビルの光とが交錯する不思議な新時代の光景だった。



山王太鼓



舞 楽



中国怒江州知子羅の風景



怒江州歌舞団を中心にアジア民族舞踊交流会に出演のメンバー達と
(日本橋劇場にて)

財団法人

黛民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黛民族舞踊文化財団は、我が国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された法人です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡業公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者（音楽、振付けを含む）、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創造活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および中国・韓国・東南アジア諸国の民族芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し、将来は資料館を設立して一般の利用に供することを計画しています。また、

(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これら舞踊団との交流や、中国・韓国・東南アジア諸国の民俗芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民族芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申しましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的をご理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には賛助会員規定を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げます。

民族舞踊文化 No. 20

2008年5月13日発行

発行人 犬丸 直

編集人 大野 晃

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-10-3 黛ビル 4F Tel 03-3583-3633

財団法人黛民族舞踊文化財団

Fax 03-3583-3639

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATOKU, TOKYO